



ナンテン (南天、南天竹)



メギ科ナンテン属 *Nandina domestica*、中国原産らしいが日本にも古くから自生。1属1種の常緑低木で高さは2～3mほど。属名は日本語の南天に由来するらしく、英語名も Nandin。関東以南によく見かける。学内でも工法庵庭の他にあちこちに生えている。6月頃に花が咲き、冬に丸い実が熟して赤くなる。葉柄の茎に接続する基部は膨らんで茎を抱くと図鑑にあった。葉は3回3出羽状複葉と言ひ、小葉の小羽軸と羽軸に関節が

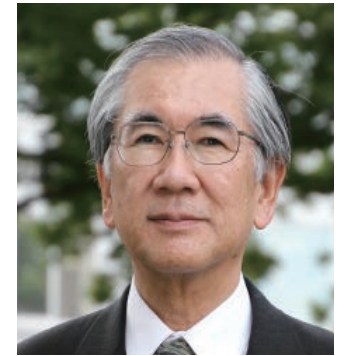
ある。葉が落ちた後の葉柄は硬くなり、関節の跡の三つの窪みを手に押しつけば跡形が残り、子供の判子であった。中国で「南天竹」と呼ばれるのは、先の尖った円錐形の葉や節のある様子が竹に似るためらしい。冬、熟した実は小鳥の餌になり、いつの間にか見えなくなる。英国に入ったのは1804年で、先端の枝に集まる6弁の小さな花と赤い実が喜ばれ、heavenly bambooとして温室栽培で広がったらしい。

ナンテンの実には数種のアルカロイドが含まれる。有毒の成分もあるので、種の伝播には不利と思うが、食べた鳥が慌てて移動するので種が広がるという。本当だろうか。ナンテンの実（生薬の南天実）にはドメスティン domestine などのアルカロイドが含まれ、咳を和らげる働きがあるらしい。また、「難を転ずる」とこ

学校法人中部大学

監事

太田明德



ろから、ナンテンの葉と実は縁起物として料理や正月の飾りに使われる。葉に含まれるナンジン nandinine には防腐・殺菌の作用もあるとのことである。

子供の頃、田舎の祖父の家に行くと、西北角に廊下から入る廁があり、扉近くの庭に面して吊り手水が下げられ、傍にナンテンが植えられていた。難を転ずるだけでなく、ナンテンと手水は縁が深いようである。

参考)

・図説「花と樹の大事典」、木村陽二郎監修、柏書房1996

・「花の西洋史事典」アリスM. コーツ、白幡洋三郎、白幡節子訳、八坂書店2008

・Wikipedia、「ナンテン」

・朝日百科「植物の世界」第8巻、p8-314、朝日新聞社1997